

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05938

研究課題名(和文)バイロン受容の日英比較の比較文学的・思想史的研究-1837年から1945年まで-

研究課題名(英文)A Study of the Reception of Lord Byron in Japan and Britain from the Perspectives of Comparative Literature and of Intellectual History: 1837-1945

研究代表者

菊池 有希(Kikuchi, Yuki)

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：70613751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,400,000円

研究成果の概要(和文)：英国詩人G.G.バイロンは西洋ロマン主義に大きな影響力を持った詩人であるが、近代日本の文学者・思想家たちも彼の個人主義と自由主義の精神に影響を受けた。明治期の日本においてバイロンの個人主義に強く感化された北村透谷は、ヴィクトリア朝期英国の文人トマス・カーライルのバイロンの個人主義の超克の議論にも関心を持ち、自身の作品の中でその超克のイメージを表現した。また、昭和前期の日本においてバイロンの自由主義に共鳴した林房雄と鶴見祐輔は、同じくそれに共感的だった同時代の英国詩人W.H.オーデンがバイロンの英雄性を軽視したのとは逆に、むしろそれを強調することで、自由主義からナショナリズムの肯定へと飛躍した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

北村透谷とカーライルのバイロンの個人主義の受容のありようを比較することで、カーライルが虚無を克服し現世を肯定する強い倫理的主体であることの意義を説き、他方、透谷が現世否定にも通じる無常の感覚を表現し得る美的主体であることの意義を説くという、両者のロマン主義の違いを明らかにすることができた。また、オーデンと林房雄・鶴見祐輔のバイロンの自由主義の受容のありようを比較することで、政治的自由主義がナショナリズムの肯定へと飛躍する過程においてロマン主義的な英雄主義の気分が大きな役割を果たすことも明らかにすることができた。本研究で得られた知見は広くロマン主義文学・思想の研究に寄与し得るものと考えている。

研究成果の概要(英文)：George Gordon Byron was a British poet with a great deal of influence on Western Romanticism, and modern Japanese literary figures and thinkers have also been inspired by his individualism and liberalism. In Meiji Japan, Kitamura Tokoku was strongly affected by Byron's individualism. He was also interested in the argument for overcoming Byronic individualism proposed by Thomas Carlyle, a literary figure of Victorian England, and he expressed this concept in his own works. In addition, Byronic liberalism resonated with Hayashi Fusao and Tsurumi Yusukey in Japan's early Showa period. W.H. Auden, a British poet and contemporary of theirs who also sympathized with Byronic liberalism, despised Byron's concept of heroism, but the thinking of Hayashi and Tsurumi was the exact opposite. By instead emphasizing this heroism, they made a logical leap from liberalism to affirmation of nationalism.

研究分野：比較文学

キーワード：バイロン 北村透谷 カーライル 鶴見祐輔 林房雄 自我の滅却 自由主義 帝国主義

1. 研究開始当初の背景

イギリス詩人 G.G.バイロンは、19 世紀前半、ヨーロッパ、アメリカ、ロシアなどの広域にわたり、文化的・政治的・社会的に多大な影響力を持った詩人である。パートランド・ラッセルが『西洋哲学史』 *A History of Western Philosophy* (1945) の中で、その影響力の大きさから詩人に一章を割くという異例の扱いをしたように、ロマン主義時代以降の西洋精神史において、バイロンは無視することのできない位置を占めている。

これまで報告者は、日本におけるバイロン受容のありようについて実証的に検討し、そこから見てくる近代日本精神史の相貌を描出する試みを行ってきた。その結果、明治期から昭和期にかけて日本の文学者・思想家たちが、西洋近代草創期の時代精神の象徴たるバイロンを受容する中で、近代精神とは何か、西洋近代/近代日本とは何かという問題に相渉り、「近代」をめぐる多彩な文学的・思想的表現を展開してきたことを明らかにすることができた。報告者は、上記の研究成果を、博士論文「日本におけるバイロン熱」(東京大学、2011.10)として、及びそれを基にした『近代日本におけるバイロン熱』(勉誠出版、2015)としてまとめている。

しかしながら、日本におけるバイロン受容の国際的な視点からの意味付けという論点については、今後の課題として残さざるを得なかった。世界各国・各地域におけるバイロン受容については、P.G.Trueblood (ed.) *Byron's Political and Cultural Influence in Nineteenth-Century Europe* (1979) や International Byron Society (ed.) *Byron: East and West* (2000)、N. Panagopoulos (ed.) *The Place of Lord Byron in World History: Studies in His Life, Writings, and Influence* (2012) 等の試みがある。中でも R. A. Cardwell (ed.) *The Reception of Byron in Europe. I&II* (2004) は、ロシアを含むヨーロッパ全域におけるバイロン受容の諸相について体系的に論じたものであり、バイロンがヨーロッパ精神史に与えた影響の大きさを示した本格的な論文集となっている。

このように、世界各国・各地域におけるバイロン受容についての研究が今世紀に入ってもなお盛んになされているのには、グローバル化の進展を背景とする世界文学論の興隆という状況があり、当時世界的な広がりを見せたバイロン熱という現象の現代的意義が再確認されているという文脈があると推察される。報告者は(ややヨーロッパ中心主義的ではあるが)上記の海外の研究動向をも踏まえながら、自身の近代日本におけるバイロン熱についての研究を国際比較の視点から捉え直し、さらに発展・深化させていきたいと考えた。以上が本研究を着想した経緯と研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

上述の通り、本研究は、これまで報告者が行ってきた、近代日本におけるバイロン受容についての研究成果を国際比較の視点から捉え直し、グローバルな地平において意義づけることを目的とするものである。バイロンは、世界各国・各地域において、個人主義の精神と自由主義の精神の体現者として受容された。世界各国・各地域におけるバイロン受容の共通のパターンは、バイロンの持つ普遍的な可能性を示唆していると、一応見なすことができる。

一方で、バイロン受容のありようは、各国・各地域の個人主義及び自由主義をめぐる歴史的文脈の違いによって異なってくるという部分もある。この相違性の軸に注目すると、バイロン受容の国際比較は、各国・各地域における、個人主義及び自由主義をめぐる文化的・思想的・社会的・政治的状況の固有性・特殊性を浮き彫りにすることに資するであろう。

本研究は、日本のバイロン受容のありようと別の国のそれとを相互に照らし合わせることで、バイロンが体現した個人主義と自由主義、及び、それぞれの国における個人主義・自由主義をめぐる歴史的状況の内実を比較文学的方法により明らかにするものである。また、影響・受容の実証的研究と、二国間の文学的現象の対比的な研究とを組み合わせることで比較文学研究に新たな領野を開拓するという、方法論に関する目標も本研究にはある。

3. 研究の方法

上述の通り、本研究は、日本におけるバイロン受容のありようと別の国のそれとの国際比較から見てくる問題系について分析・解釈を行うものであるが、当然、世界の全ての国との比較を行うことは可能でもなく、また有効でもない。世界各国のバイロン受容の概要について二次資料から広く情報・知見を集めつつ、日本のそれと比較して意味がある国・地域のバイロン受容を個別に取り上げ、両国間の受容の諸相を具体的に照らし合わせるという方法が有効と考えられる。

報告者がバイロン受容の国際比較の研究を行うにあたり、日本におけるバイロン受容の比較対象として適当と考えるのが、イギリスにおけるバイロン受容である。イギリスはバイロンにとっての母国であるが、そのイギリスにおいては、他のヨーロッパの多くの国・地域と違い、バイロンに対する評価は、彼の私生活をめぐる醜聞も災いして、生前から低下の傾向が顕著に見られた。バイロン死後のヴィクトリア朝期においても、バイロンに対する再評価の言説は部分的に出てきつつも、物質的進歩や中流階級の保守的な道徳観を楽天的に信じる時代の雰囲気の中にあって、バイロンの悲観的で懐疑的、反社会的で不道徳な個人主義的身振りは急速に歓迎されなくなっていく。

このようなヴィクトリア朝期イギリスにおけるバイロン評価・バイロン言説は、バイロンの伝記的事実や作品とともに、英学の摂取に積極的だった明治期の日本にも早くから紹介され、日本におけるバイロン受容のありように影響を与えることとなった。この点を踏まえるならば、特に

明治期の日本におけるバイロン受容とヴィクトリア朝期のイギリスにおけるそれとを、両者の間の影響関係にも留意しつつ照らし合わせることに意味があると考えられる。

加えて、日本においてバイロン熱が二度目の盛り上がりを見せる昭和前期のバイロン受容の意味を考察する上でも、やはりイギリスにおける同時代のバイロン受容のありようを参照枠とすることが有効と判断される。報告者がこれまでの研究において明らかにしているように、昭和前期のバイロン受容者は、大正期における、マルクス主義的見地からのバイロンの価値の再発見の流れを引き継ぎつつ、バイロンの政治的自由主義に対する評価に主たる関心を向けていた。このことは、同時代、即ち第一次及び第二次両世界大戦の戦間期の時期のイギリスにおけるバイロン受容者にも当てはまる場所がある。W.H.オーデンやジョージ・オーウェルなどがそうしたバイロン受容者であるわけだが、この同時期の日英両国のバイロン受容の並行現象の意味について考えるには、両国のバイロン受容の国際比較を行うという作業が必要となると言える。

以上のことから、報告者は、日本におけるバイロン受容の意味を国際的な視点で捉え直すための有効な参照枠としてイギリスにおけるバイロン受容に注目し、両者の間に見られる影響関係や並行現象に留意しつつ比較を行うという研究方法をとることとした。その際、本研究で扱う資料体は、ヴィクトリア朝が始まった1837年から、大東亜・太平洋戦争が終結する1945年までの日英両国のバイロン受容に関わるテキスト群と見定める。そして具体的な分析の方法としては、日本においてバイロン熱が盛り上がりを見せた二つの時期、即ち明治期と昭和前期の日本のバイロン受容についての再解釈を基軸としながら、それと内在的な関連があるイギリスのバイロン受容との照合を行う。明治期の日本のバイロン受容については、ヴィクトリア朝期のイギリスにおけるバイロンの個人主義をめぐる価値評価の言説からの影響関係に注意しながら、比較文学的方法により分析を行う。また、昭和前期の日本のバイロン受容については、主に戦間期のイギリスにおけるバイロンの政治的自由主義をめぐる再評価の動きとの並行性に注意しながら、思想史研究の方法をも取り入れつつ分析を行う。

4. 研究成果

(1) まず、ヴィクトリア朝期のイギリスにおけるバイロン受容のありようの全体像を二次資料の読み込みから把握しつつ、必要に応じて主要なバイロン受容者の一次資料の精読を行った。中でも、「汝のバイロンを閉じよ、汝のゲーテを開け」Close thy Byron, open thy Goethe という有名な言葉を吐き、バイロン主義(バイロンの個人主義・バイロンの自我主義)の超克の必要を早くから説いていたトマス・カーライルの作品、特に上記の言を含む『サター・リザータス』(『衣装哲学』) *Sator Resartus* (1836)の精読を行った。その結果、カーライルが、バイロン主義の本質を負う自我意識の過剰として捉え、同じく自我意識の過剰をもたらすと(カーライルが考えた)ジェレミー・ベンサム流の量的快楽主義として通底し合うものと捉えていることを確認した。ベンサム流の功利主義に見られる合理主義的・機械論的世界観は、本来、バイロン主義を支える懐疑主義的・ロマン主義的世界観と根本において相容れないところがあり、この点で、バイロン主義に自我意識の過剰のみを見たカーライルのバイロン観は、一面的で偏頗なものであったとすることができる。だが、その後のヴィクトリア朝期イギリスにおけるバイロン評価の低迷の流れを用意したものひとつにカーライルによる歪んだバイロン受容があったことは確かであり、そのことを明らかにできたことは収穫であった。上記の研究成果は、いまだ論文としてまとめるまでには至っていないものの、後述の(2)と(3)の研究成果の基盤をなしている。現在、それ自体論文としてまとめることを計画中である。

(2) また、カーライルにおけるバイロン主義の超克のありようについて解明を進めてゆく作業と並行して、研究開始時に立てていた、北村透谷がカーライル的方法によるバイロン主義の超克を文学的・思想的に試みていた、という仮説の検証を行った。透谷は、バイロンの『マンフレッド』 *Manfred* (1817) から影響を受けつつ『蓬莱曲』(1891)を書いたが、この『蓬莱曲』において、カーライルの『サター・リザータス』の中で示された、バイロン主義の超克のイメージをも受容している。つまりそこには、透谷におけるバイロン主義への共鳴と、バイロン主義の超克を主張するカーライルの思想への共鳴の両方が見られる。透谷は、カーライルが『サター・リザータス』において絶望と虚無をもたらすバイロン主義と通底するものとして批判したベンサム流の量的快楽主義の世界観・人間観のイメージを源泉として『蓬莱曲』の大魔王のイメージを造型している。そして、『蓬莱曲』のクライマックスにおける、大魔王による人間世界の大破壊のイメージを、ベンサム流の世界観・人間観に代表される、すべてを機械化し合理化する近代主義がもたらす絶望と虚無のイメージを含意するものとして表象している。透谷は、バイロン主義＝ベンサム流の量的快楽主義＝近代主義を超克する必要性についての認識をカーライルと共有しつつ、(両者の間でベンサム流の量的快楽主義＝近代主義に対する理解の深浅の差はありつつも)基本線としてはカーライルの主張に寄り添うかたちで『蓬莱曲』を書いていたことを、上記の検討より明らかにした。以上の議論については、口頭発表「北村透谷『蓬莱曲』とカーライル『サター・リザータス』」(日本比較文学学会第78回全国大会、2016.6)、及び、学術論文「ロマン主義による近代の超克—北村透谷『蓬莱曲』とトマス・カーライル『サター・リザータス』」(東大比較文学学会『比較文学研究』第103巻、2017.9)として公にした。

(3) さらに、バイロン主義の本質としてある自我意識の過剰を超克するための方法として、カ

ーライルが「自我の滅却」Annihilation of Self の実践を説いていることに対し、透谷が強い関心を示している事実があることを重視して、バイロン主義の超克の方法としてのカーライル流「自我の滅却」のイメージを透谷がどのように受容しているかについての検討を行った。透谷は、カーライル由来と思われる Annihilation の語を評論「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(1893.2)の中に書きつけ、バイロンの自我意識を滅却する文人のイメージを芭蕉のイメージに投射して描き出している。そして「人生に相渉るとは何の謂ぞ」以降の文業においては、恐らくは自らもバイロンの自我意識の滅却を詩的に表現する文人であろうとの考えから、主に叙情詩作品において「自我の滅却」の詩的表現を行っている。カーライルは、「汝のバイロンを閉じよ、汝のゲートを開け」という言い方でバイロンの自我意識の超克の必要を説き、「自我の滅却」後に開ける、諦念から救済、そして行為の価値の発見へと展開するゲータ的な境地にまで自己を飛躍させることの意義を主張していたが、透谷は叙情詩において「自我の滅却」の瞬間の美の表現に腐心した。こうして透谷によって試みられた「自我の滅却」の詩的表現は仏教的無常感の色合いを帯びることとなったが、このようなバイロン主義のカーライルの超克の方法の換骨奪胎の仕方には透谷独自の文学的・思想的個性が立ち現れていた。以上、ヴィクトリア朝期イギリスを代表する文人カーライルにおけるバイロンの自我意識の超克のありようと、明治前期の日本のロマン主義文学・思想を代表する北村透谷におけるそれとを比較することで、両者ともバイロンの自我意識の過剰の問題にひとしく拘りながらも、カーライルの方は、現世を肯定する強い倫理的主体であることの意義を説き、一方、透谷の方は、現世否定にも通じる無常の美を表現し得る傑出した美的主体であることの意義を説くという違いがあることを明らかにすることができた。上記の議論については、学術論文「カーライルによるバイロンの超克—北村透谷における交響する影響の可能性についての比較文学的考察(三)」(都留文科大文学部国文学会『国文学論考』第55号、2019.3)として公にした。

(4) 透谷とカーライル双方のバイロン受容のありようを比較する作業を行いつつ、ヴィクトリア朝期イギリスにおけるバイロン言説の全体像を把握すべく、カーライル以外のバイロン言説の精査についても並行して行った。そしてその作業の中で M.アーノルドによるバイロン再評価の意義を確認することができた。ヴィクトリア朝期のイギリスにおいて、バイロンは、同時代の価値観に適合しないという理由から退けられることが多かったが、M.アーノルドは、まさにヴィクトリア朝的価値理念としての「誠実さ」sincerity をバイロンの政治的自由主義の精神の中に見出すというかたちで再評価を行っている。M.アーノルドは、ヴィクトリア朝期イギリス社会の支配階級となったブルジョワジーこそが実は偽善的な俗物主義 British Philistinism にまみれ不誠実な生活をしている、としつつ、逆にバイロンこそイギリス社会に蔓延する俗物主義を嫌悪し真の自由のために戦った、「傑出した誠実さと強さ」the excellence of sincerity and strength を持った詩人であると、価値評価の転倒を行った。M.アーノルドのバイロン論が提示した「ヴィクトリア朝期イギリス=大英帝国の偽善—バイロンの誠実」という図式は、昭和前期日本のバイロン受容者である鶴見祐輔と林房雄のバイロン評価においても見られるものである。このことが意味するものを明らかにすべく、M.アーノルドのバイロン論が鶴見と林に影響した可能性をも考慮しながら、昭和前期=1930年代の日本において、大英帝国の支配原理(資本主義・自由貿易(帝国)主義・帝国主義)に対する対抗原理としてバイロンの政治的自由主義を評価するバイロン言説が出てきたことの意味を検証した。その結果、バイロン受容者の鶴見も林も、近代日本の帝國的ナショナリズムの問題にそれぞれコミットする中で、帝国主義に対する批判者としてバイロンを肯定するという彼ら自身のバイロン評価も微妙に屈折させながら、その屈折のありようにおいてそれぞれの自由主義・帝国主義をめぐる思想を表現していたことを明らかにした。以上の議論については、口頭発表「昭和前期におけるバイロニズム—鶴見祐輔と林房雄の場合」(日本比較文学会東京支部例会、2019.9)として公にした。

(5) また、自由主義と帝国主義及びナショナリズムの間の複雑な関係性が問い直された1930年代の日英両国のバイロン受容・バイロン言説のありようを広く検証してゆく中で、鶴見祐輔のバイロン受容の持つ意味の大きさを確認した。自由主義者と帝国主義者の二つの顔を持つ鶴見は、M.アーノルドやジョン・モーリーらヴィクトリア朝期イギリスの文人のバイロン論のみならず、アンドレ・モーロアのバイロン評伝やその他欧米のバイロン論にも目を通し、自身、『英雄天才史傳バイロン』(1935)という評伝も書いている。検証すると、彼のバイロン熱の背後には、自由主義と帝国主義とナショナリズムの気分の混淆が見られた。鶴見は1930年代初め、米国講演旅行に始まる足掛け三年あまりの欧米旅行を行い、その体験をもとに『欧米大陸遊記』(1933)という著作を物しているが、そこにおいてバイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』*Childe Harold's Pilgrimage* (1812, 1816, 1818)の詩節を多く引用している。その引用の仕方には、彼自身の英雄主義的気分の膨張が見られた。そしてさらに検証してみると、鶴見は、小国ナショナリズムにコミットするバイロンの政治的自由主義に対する共感を、英雄崇拜・英雄主義の気分を媒ちとして、大国ナショナリズム・帝国主義の肯定へと滑走させていることが明らかになった。こうした鶴見のバイロン受容のありようは、バイロンの自由主義が帝国主義・ナショナリズムと親和性と相反性の双方を持つことを示唆している。以上の議論については、口頭発表「鶴見祐輔のバイロン熱—『欧米大陸遊記』における『チャイルド・ハロルドの巡礼』受容から見えてくるもの」(日本バイロン協会談話会・第14回東北ロマン主義文学・文化研究会、2019.7)及び、学術

論文「鶴見祐輔のバイロン熱—『歐米大陸遊記』における『チャイルド・ハロルドの巡礼』受容」
(日本比較文学会『比較文学』第62巻、2020.3)として公にした。

(6) 昭和前期日本のバイロン受容者の比較対象として当初想定していた、両大戦間期のイギリスにおけるバイロン受容のありようについては、この時期の代表的なバイロン受容者であるW.H.オーデンのバイロン受容の精査、特に彼の長詩「バイロン卿への手紙」“Letter to Lord Byron”(1937)の読み解きに予定以上の時間を要したため、1930年代のバイロン受容の日英両国の国際比較について、かたちある業績としてまとめるには至らなかった。だが、オーデンが「バイロン卿への手紙」において、バイロンの自由主義に対する共鳴を部分的に表明しながら、ロマン主義的英雄詩人としてのバイロン像については相対化する方向で書いていること、そしてその点で、昭和前期日本のバイロン受容者である林房雄や鶴見祐輔とは異なる行き方をしていることが分かった。また、バイロンの政治的自由主義に対する共感の強度の点においては、むしろ同じくスペイン内戦にコミットしたオーウェルの方こそ注目すべきであることもあわせて確認した。上記の議論については、現在、論文としてまとめることを計画中である。

(7) 全年度を通じて、日本におけるバイロン書誌を整理すべく、各種文献検索データベースや雑誌記事索引などを利用しながら、明治期から昭和前期までの日本におけるバイロン関連文献を広範囲に調査・収集し、分析を行った。イギリスにおけるバイロン受容に関する文献調査についても並行的に行い、O.J. Santucho (ed.) *George Gordon, Lord Byron: A Comprehensive Bibliography of Secondary Materials in English, 1807-1974* (1977) や Clement Tyson Goode, Jr.(ed.) *George Gordon, Lord Byron: A Comprehensive, Annotated Research Bibliography of Secondary Materials in English 1973-1994* (1997)、また欧文記事検索データベースなどをも用いながら、資料収集・整理を行った。また、2018年度及び2019年度に行った大英図書館その他での現地調査で、日本国内では入手しにくい二次資料を閲覧・収集した。これらの作業で得られた知見は、(1)及び(6)の議論と複合させてまとめることを企図しているが、日本におけるバイロン書誌の整理の一部成果については、項目執筆「バイロンと日本(仮)」(日本バイロン協会(編)『バイロン事典』(音羽書房鶴見書店、2020年度内刊行予定))(13頁相当)としてまとめた。近々公にされるはずである。

以上、日本におけるバイロン受容のありようをイギリスにおけるそれと比較することを通じて、その意味・意義をグローバルな視点から捉え直すことを目指した本研究は、一定の成果を得ることができたとして自己評価する。即ち、バイロン受容という特定の視点から、それに関係した近代日本の文学者・思想家の文学的・思想的営みをグローバルな地平に開いてゆくということに一定程度成功したと考えている。今後は、本研究から得られた知見をバイロン研究、ひいてはそれを包含するロマン主義文学・思想研究の方に還元し、バイロンの文学及び思想のさらなる解明を行ってゆくつもりである。また、本研究で行った、影響・受容の実証的研究と二国間の対比的な研究とを組み合わせる比較文学的・思想史的研究の方法についても十分な手応えを得ることができたので、今後の研究においても実践してゆくつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊池有希	4. 巻 55
2. 論文標題 カーライルによるパイロンの超克 北村透谷における 交響する影響 の可能性についての比較文学的考察(三)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学論考	6. 最初と最後の頁 pp.21-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池有希	4. 巻 103
2. 論文標題 ロマン主義による近代の超克 北村透谷『蓬莱曲』とトマス・カーライル『サター・リザータス』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 比較文学研究	6. 最初と最後の頁 pp.39-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池有希	4. 巻 62
2. 論文標題 鶴見祐輔のパイロン熱ー『歐米大陸遊記』における『チャイルド・ハロルドの巡礼』受容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文学	6. 最初と最後の頁 pp.22-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊池有希
2. 発表標題 北村透谷『蓬莱曲』とカーライル『サター・リザータス』
3. 学会等名 日本比較文学学会第78回全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 菊池有希
2. 発表標題 鶴見祐輔のバイロン熱ー『歐米大陸遊記』における『チャイルド・ハロルドの巡礼』受容から見えてくるもの
3. 学会等名 第14回東北ロン主義文学・文化研究会 & 2019年度日本バイロン協会談話会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊池有希
2. 発表標題 昭和前期におけるバイロニズムー鶴見祐輔と林房雄の場合
3. 学会等名 日本比較文学会東京支部例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【項目執筆】 菊池有希「バイロンと日本（仮）」（日本バイロン協会（編）『バイロン事典』、音羽書房鶴見書店、2020年度内刊行予定）（13頁相当）</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考